幻想郷戦国時代

ノーレッジ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は幻想郷歴ｘｘ年

幻想郷では異変ごとに増える新参者によって重大な資源不足が発生。各地で小競り合いが起こるようになっていた。

その中でこのままでは埒が明かんと幻想郷の統一を目指した集団が現れる。

その名も紅魔館。

それを受け、幻想郷に住む他の集団も続々と名乗りをあげる。八雲紫もいかなる考えかそれを黙認。こうして幻想郷は戦乱の渦に巻き込まれた。

この戦乱に関し特に大きな反応を見せているのは以下の集団である。

元凶となった紅魔館
はるか上空の冥界から野心を覗かせる白玉楼
鉄壁の防御を固め漁夫の利を狙う永遠亭
兎にも角にもこの戦乱の中で身を守り続ける必要がある人里
いまこそ勢力拡大の時と血気盛んな妖怪の山
妖怪の山とは別個に機会を伺う守矢神社
地上の混乱に乗じて何かを企む地霊殿
地上で何か面白いことがあると聞き引っ掻き回そうとやってきた天界（の比那名居天子）
まずは安定を求めつつ何処かで一発逆転してやろうと目論む草の根妖怪ネットワーク
騒動があればまずは騒ぎ出す妖精群
これら全てを大局的に観察する博麗神社

こうして幻想郷戦国時代が開幕した。

目次

起 1—1 …… 1
起 1—2 …… 5
起 1—3 …… 8
起 1—4 …… 11
起 2—1 …… 15
起 2—2 …… 20

起　起　1―1

side　紅魔館

紅魔館の食堂にて。

「皆集まったね？じゃ、第一回作戦会議を始めるわよ。と言ってももう大まかな作戦は私とパチェで決めたのだけれどね。」

レミリアが議長となり他のメンバー、咲夜、フランドール、パチュリー、美鈴らと机を囲む形で作戦会議が始まっていた。

「あら、初耳ですわね。お嬢様」

「咲夜にはまだ言ってないからね。パチェ、発表して。」

パチュリーが立ち上がり、魔法で作った図などを出しながら説明を始める。

「分かったわ。えーー、コホン、まず私達が最初に攻め込むのは永遠亭。これはレミィ、フランドール、咲夜の三人で行ってもらうわ。そして私と美鈴でその間館を守る。」

美鈴が挙手して発言する。

「え、守りきれますかね？パチュリー様は基本援護だけですよね？全方位から天狗が攻

めてきたりしたら私だけじゃ守りきれませんよ。」
「大丈夫よ。ついさっき紅魔館魔導防衛システムが完成した。門以外の所から飛んできた攻撃は私が図書館からすべて撃ち落とす。」
「あ、そうですか。」
　ここでレミリアが引き継ぐ。
「私達三人の攻撃隊はとにかくスピード重視パワー重視で行くわよ。小難しい作戦なんかいらない。真正面から押し通す!」
　その言葉を聞きフランドールが喜ぶ。
「あはは!シンプルでいいね!でも、竹林はどうするの?あそこは迷路みたいになっていて入ったらすぐ迷うってお姉様が言っていたけど。」
「あら、フラン。竹なんてあるから迷うのよ。全部焼き払ってしまえば迷わないわ。」
「さて、じゃあ他に質問はあるかしら?」
　パチュリーの問い掛けに答えるものは居ない。
「それじゃ、二刻後に作戦決行!今夜は満月よ!吸血鬼の恐ろしさを知らしめるのにこれ程適した日もないわ!」
　レミリアの激に全員が動き始める。

s.ｄｅ　白玉楼

「あのー幽々子様。そろそろ私にも作戦を教えていただけないでしょうか・・・」
「あらあら妖夢。さっきから何回も言っているじゃないの～。タイミングを見計らって私が紅魔館を攻め落としてくるって」
　縁側で呑気な会話をしているのは白玉楼の主従である。
「ですからどうやって攻めるのかとかタイミングって何なのかとかその間私はどうすれば良いのかとか何も分からないのですが！」
「まあまあ、そんなに焦らなくても直ぐ分かるってば。・・と、どうやら戻ってきたようね。」
　幽々子の視線の先には騒霊三姉妹がいた。
「おかえり～　それじゃ報告よろしく。まずメルランから。」
「無事守矢神社と同盟締結してきたよ～！あっちの防御に妖夢さん貸す代わりにこっちの作戦を手伝うという条件で。」
「え、守矢神社の防御？」
「分かったわよ。ありがとう。次、リリカ。」
　妖夢の驚きをさらっと流して話を続ける幽々子。
「えーとね。暇そうにしている天人がいたから話持ちかけてみたよ。面白いことやるな

ら手伝うってさ！」
「あら、良くやったわね。（多分天子ね）
最後、ルナサ。」
「・・・紅魔館内で着々と攻撃準備しているのを確認。防御に残るのは門番と図書館の魔女のみの様子です。」
騒霊三姉妹から次々報告を受けご満悦な様子の幽々子と顔にクエスチョンマークを浮かべる妖夢。
そうして幽々子は次の指示を出し始めた。
「それじゃあリリカはその天人さんに面白いことやるから手伝えと伝えて頂戴。ルナサは再び紅魔館の偵察。攻撃隊が出発したらおしえて。メルランはしばらく待機で。」
「分かったー」
「分かったよ～」
「分かりました。」
「で、妖夢はすぐ守矢神社に向かって頂戴。あっちは今天狗の猛攻を受けて大変らしいから。」
「はっはい！分かりました！今すぐ行きます！」
一通り指示を出し終えた幽々子は身支度を整えに行き白玉楼は静かになった。

起　1―2

ｓｉｄｅ永遠亭

「優曇華とてゐは永遠亭の周りに罠を仕掛けてきなさい。優曇華は狂気結界も忘れずにね。姫様は無限回廊の準備をお願いします。」

永遠亭の策士、永琳が考えたのは立地をいかしてとにかく守りを固め、周りが疲弊してから打って出ることだった。

「分かりました、師匠！」

「わかったよー」

二人のうさぎが出かけたあと永琳は一つ溜息をつく。

「優曇華によって強化された迷いの竹林と姫様の無限回廊。これだけあれば入ってこれる奴はそうそう居ないと思うのだけどねぇ。

・・・やはり何か胸騒ぎがするわね。」

紅魔館の攻撃隊到着まで　あと一刻

ｓｉｄｅ　人里

「ああ、全く厄介なことが始まった！隙間妖怪は何をしている!?この人里が滅んだらどうしてくれるんだ！」
「ま、まぁまぁ、落ち着きなよ、慧音。焦ってもしょうがないって。」
人里の警備に当たる慧音と妹紅。人里の人間には既に外に出ないよう指示し、慧音の能力で人里を隠した。しかしそれでも今のこの状況。何が起こるか分からないし、いつまで続くかも分からない。慧音が苛つくのも無理は無いだろう。
「あぁ、今夜は満月か。何かやるなら今夜のうちだが・・・くっ、何も思いつかん。」
「そうだ、慧音。博麗神社に助けを求めるのはどうだ?あそこの巫女は人間の味方だし、何らかの手を打ってくれるんじゃ・・・」
「む、そうだな。すまないが妹紅、ちょっと行ってきてくれないか?今手紙を書くから。危険なのは承知だが・・」
「大丈夫だよ、私は死なないし。」
「ん・・・わかった。じゃあこれを頼む。くれぐれも燃やすなよ。」
ｓｉｄｅ　妖怪の山
妖怪の山、天魔の屋敷に二人の烏天狗が舞い降りた。
「天魔様！報告です！現在の守矢神社攻撃組、天狗１００名河童５０名のうち天狗に１６名の負傷者です！」

「神社は洩矢諏訪子と東風谷早苗により強固な結界が張られ、侵入可能なのは入り口の鳥居のみ。そこに、八坂神奈子が陣取り攻撃を跳ね除けている状態です。こちらは正面から交代で波状攻撃を続けていますが正直攻めあぐねています。」
「ぬぅ。わかった。では攻め方を変える。河童等には兵器で結界を攻撃させよ。天狗は距離を置いて射撃系中心で八坂を攻撃。向こうはたった三人しかいないのだから数で攻めればいつかは落ちる！」
「了解です！」
　伝達役の二人を下がらせ、天魔は次の作戦を練りにかかる。
「何とかしてあの神社さえ落としてしまえばこの山は我等のもの。そうなれば後はここを拠点にいくらでも攻め様が・・・・・」
　そう、妖怪の山を拠点とする天狗、河童達にとって守矢神社は目の上のたんこぶだったのである。

起　1—3

ｓｉｄｅ　守矢神社

「神奈子様！大丈夫ですか！」

「ああ、まだ何とかなる。そっちは。」

「結界ならまだまだ余裕だよー。でもあいつら戦法変えてきたね。そろそろまずいんじゃない？神奈子。」

守矢神社の三柱は大量の天狗と河童から集中攻撃を受け身動きが取れないでいた。そこに妖夢が来て、それにいち早く早苗が気づく。

「っっ！　諏訪子様、援軍です！結界を開けてください！」

「ああ、冥界の。そらよっと。」

妖夢が上から降りてくる。

「遅くなりました。白玉楼の魂魄妖夢です。幽々子様の命で援護に来ました。」

「妖夢さん！ありがとうございます。ここは今私達が結界を張っているので鳥居の防御を神奈子様と・・・」

「早苗さん、えーと鳥居の防御は私一人で十分です。神奈子殿は幽々子様が紅魔館攻めに加わってほしいと。」
「あ、そうですか。分かりました。でもお一人で大丈夫なんですか？神奈子様ですら相当手こずっていますが。」
「問題ないです。魂魄『幽明求聞持聡明の法』」
妖夢は半霊を使い分身し、鳥居前へと駆ける。
前衛の半霊による切り込みと後衛の本体による援護射撃の連携攻撃で天狗部隊が半壊させられたのはそれから四半刻後のことだった。
そして神奈子は冥界に行き、紅魔館攻めの準備が着々と整う。

ｓｉｄｅ　地霊殿

「あら、お帰り。こいし。」
「ただいまーお姉ちゃん！」
地霊殿の自室にいるさとりのもとにこいしが帰ってきたのは紅魔館の攻撃開始、半刻前ほどである。
「地上の様子はどうかしら？」
「んーとね。紅い屋敷の吸血鬼達が何処かに攻め入ろうとしていたよ。それで幽霊と神

様とかがその隙にお屋敷に侵攻！ってとこかなー」
　そう。こいしはその自らの特性を活かし、偵察役を担っていた。
「なるほどね。大分派手に動いているようね。それじゃ私達もそろそろ動こうかしらね。　こいし、お燐とお空を呼んできてもらえるかしら？その後また偵察に行ってきて欲しいのだけど。」
「りょーかい！いってきまーす。」

　ｓｉｄｅ　天界

「ふーん、他所に進行中で守りの薄い紅魔館を攻めると。面白そうじゃない。吸血鬼達が帰ってきてからの顔が見ものね。」
　天界の暇な天人、比那名居天子はリリカの二回目の伝言で聞いた幽々子の策に乗ろうとしていた。
「わかった。支度をしてすぐ行くとあの亡霊お嬢様に伝えて頂戴。私も参加するわよ。」
　リリカが去った後天子は一人ほくそ笑む。
「楽しくなってきたじゃない。これなら私一人が幻想郷を支配する日もそう遠くは・・・」

起　1―4

ｓｉｄｅ　草の根妖怪ネットワーク

どこの勢力にも属していない弱小妖怪たちの集まり、それが草の根妖怪ネットワークである。そこに属する彼女らは特に大きな動きを見せることはなく、互いに情報交換しあうことで身を守っていた。

「影狼さん。もう少しで吸血鬼達が永遠亭に攻め入る。竹林は危ないよ。」

「あら、ありがとうございます、リグルさん。魔法の森なら今は安全ですかね。」

「あ、小傘ちゃん！命蓮寺っていまどんな感じなの？」

「ミスチー！えーと命蓮寺はね、中立を貫こうとしているよ。あそこにいれば安全だから危なくなったらすぐおいで！」

・・・しかしこうして身を守り合う中、殆ど全員が考える事があった。

『いつか強い勢力の奴らに一泡吹かせてやりたい。』

それが実現するのはもう少し先の話になる。

ｓｉｄｅ　妖精群

幻想郷に山ほどいる妖精たち。しかし彼女らを脅威と感じる妖怪は一人もいないだろう。

何故ならいくら数がいると言っても一人一人はたいした力を持たず、また連携を取って戦うようなことも無いからである。殆どが目の前にいる妖怪に向かって適当に弾を撃ち、返り討ちにあって一回休みとなる。

しかし例外もいる。

「はっはっは！こんな時代を待っていたわ！いまこそ私達妖精が天下を取るときよ！」

「といってもねぇ、サニー。特に何か考えがあるわけでも無いんでしょう？」

「う、まぁそうだけど・・」

博麗神社近くの木の中で盛り上がっているのは光の三妖精である。彼女らもこの戦乱の空気に当てられて、気が大きくなっていた。

「あ、そうだ。じゃあこういうのはどう？」

「なに、スター？」

「ほら、あの氷精いたじゃない。」

「あぁ、チルノ！あいつに協力させてみるか！」

「そうそう、三人じゃ無理でも四人集まれば・・」
どうやら意見が纏まったような三人は霧の湖目指して飛んでいった。

ｓｉｄｅ　博麗神社

「はぁ、全く。なんで皆勝手に集まってくるんだか・・・」
「まぁまぁ良いじゃないか、霊夢。戦力は多いに越したことが無いだろう?」
博麗神社にはこの戦乱の中にも関わらず数多くの人妖が集まっていた。
代表的な所では、人間の霧雨魔理沙、鬼の伊吹萃香、妖怪の風見幽香、人形遣いのアリス・マーガトロイド、寺から抜け出してきた二ツ岩マミゾウ、封獣ぬえなどそうそうたる顔ぶれである。
霊夢の人柄に集められた者、打算で来た者、思惑はそれぞれであろうが、単純な戦力だけで見るならばどこの集団にも引けをとらない大勢力となっていた。
しかし、霊夢は今のところ動きを見せる様子はない。ただただ幻想郷の各地に目を光らせながら集まった人妖を眺めるだけである。
そんな所に慧音の手紙を携えた妹紅がやって来たのは紅魔館の永遠亭攻撃開始ちょっと前である。

「霊夢、これを。慧音からの手紙だ。」
「うん？　　・・・ふーん、なる程。人里が危険だから何とかして欲しいと。　そうねぇ。わかったわよ。もう少しで一つ大きな動きが始まるからそれが終わったら対処するわ。それまでは自分でなんとかしろと慧音に伝えて頂戴。　」
「ん、わかった。」
その後、霊夢の取った方策に幻想郷中が震撼するがそれはもう少しあとの話。
次に起こるのは紅魔館の永遠亭侵攻と、その隙をついた天空連合の紅魔館攻めである。

起　2―1

紅魔館攻撃隊ｖｓ永遠亭　前半

「行くわよフラン、咲夜!!合わせなさい！　紅符『スカーレットシュート』」

「傷魂『ソウルスカルプチュア』」

「禁弾『スターボウブレイク』」

紅い弾と虹色の弾幕、そして無数の斬撃が竹林を片っ端から破壊していく。

これにより迷いの竹林はその効力を失い、鈴仙が張った、竹林の迷宮効果を高める狂気結界も効果を無くす。また、竹林内の大量の罠も同時に吹き飛ばされていった。

「!!

見えた、あれが永遠亭だ！」

程なくして永遠亭はその姿を現した。

「行きますか、お嬢様。」

「いや、ちょっと待て。あいつらのことだからどうせ中も・・・　よし、フラン！折角だからあの屋敷も破壊してしまいましょう。」

「はーいお姉様。準備ＯＫ！」

レミリアとフランドールがそれぞれスペルカードを構えた・・・その時、二人の視界が歪む。
「ふん、そんなことさせるわけ無いでしょう?·貴女達はここで引き返すのよ!·」
突如、鈴仙が現れ二人の行く手を遮る。
「チッ、厄介な奴が・・・咲夜、任せたわ」
「御意。　『咲夜の世界』」
次の瞬間、咲夜と鈴仙は遠く離れた所へと転移していた。
「!!?　何が起きたの!?」
「貴女の波長を狂わせる能力·確かに強力ですが、光より速く動ける私の前では無意味。ここは足止めさせて貰いますわよ。」

「そして誰もいなくなった・・・と。行きましょう、お姉様!·」
「そうね、フラン。　神槍『スピア·ザ·グングニル』」
「禁忌『レーヴァテイン』!·」
紅い槍と剣が永遠亭を襲う。しかしそれらは突然現れたレーザーの網に防がれた。
「まったく、ここまで力ずくとはね・・・屋敷を壊されるわけには行きませんから、ここ

からは正々堂々と戦うことにしますわ。」
　亭から現れたのは八意　永琳である。
「出たな藪医者。降伏するなら今のうちだぞ。」
「笑止。貴女達こそ、無事に帰るなら今の内よ。」
「ふん。それよりあんた一人しか出てこないのかい？あの引きこもりのお姫様はどうしたね。」
「姫様をこんなところで戦わせるわけ無いでしょう。貴女達二人程度、私一人で十分だわ。　天呪『アポロ１３』」
「行くわよフラン！　夜符『クイーン・オブ・ミッドナイト』」
「りょーかい！　禁忌『クランベリートラップ』」
　こうしてスカーレット姉妹ｖｓ八意　永琳の戦いが始まった。
　序盤は数に勝る姉妹が押していたものの、永琳の相手の移動を封じるスペルカードによって得意の体術を活かせなくなった二人は追い詰められ始めていた。
「あら、粋がっていた割には大したことないのね。　秘薬『仙香玉兎』」
「がッッ、くそっ　また！」
　大量のレーザーが闇を貫き、体当たりを敢行しようとしたレミリアを縫い止める。吸血鬼の再生能力により致命傷には至らないが、そのダメージは確実に刻み込まれてい

く。そう、猛毒のように。
　一方フランドールは、レーザーによる移動制限にストレスを感じると共に昔のトラウマが呼び起こされていた。
「う～　狭いとこ、イヤ。もう、閉じ込められるのは、イヤダ。」
「フラン！しっかりしなさい！　っっと　このっ。」
　迫る大弾を爪で切り裂きつつ、レミリアはフランドールを助けに行く。
「フラン、私が道を開くわ。それを使って何とかしてちょうだい！」
「・・・わかったわ、お姉様。　任せて。」

「そろそろ無駄な足掻きは止めてもらえないかしらね？こっちだって暇じゃないのよ。
『天網蜘網捕蝶の法』」
　永琳がここぞとばかりに大技を繰り出す。
「はっ、ここからが本番よ。神鬼『レミリアストーカー』！」
「禁忌『フォーオブアカインド』」
　永琳の細いびっしりとしたレーザーの網を、レミリアの太いレーザーが貫いた。それによって空いた隙間を縫うように、四人に分かれたフランドールが飛び回る。
「分身・・・！厄介ね。　錬丹『水銀の海』」

スペルを切り替え自分の左から迫る二人を落とすがどちらも本体ではなかった模様。スペルブレイクし、弓に矢をつがえ放ち、更にもう一人を倒すがそれも偽物。その頃には本体がすぐそばまで迫っていた。

「キュッとして、どかーーん！」

永琳の体が爆ぜる。

起　2―2

紅魔館攻撃隊ｖｓ永遠亭　後半

幻想郷での戦いは当然不殺が前提である。これは弱き者には助けになるだろうが、強者にとっては足枷にしかならない。どうしてもある程度の手加減が必要になるからだ。

しかし、相手が決して死なない蓬莱人だったらどうだろうか？

「きゃははは！もう一回！ドカーン！」

「ガハッ。このっ・・」

フランドールの強力過ぎる能力ですら、使用を禁じる必要はおろか手加減する必要すら無い。永琳はたちまち破壊と再生の無限ループに取り込まれてしまった。

「フラン、一旦ストップ。」

「？　はーい。」

６回ほどループが繰り返されたあとレミリアがストップをかけた。

「さて、藪医者。そろそろ降参してくれないかい？こっちも暇じゃないんだ。」

先程の相手のセリフを真似て投げつけるレミリア。しかしさっきとは状況が違う。

「お前が少しでも動いたらフランの能力を発動する。今お前に許されているのは降参宣言だけだ。」
「くっ。やるわね・・貴女達。」
　この状況でにやりと笑みを浮かべる永琳。そう、彼女にもまだ策はある。
「禁薬『蓬莱の薬』」
　どこからか響いた声がスペルカード宣言をする。
「チッ、フラン!」
「キュッとして・・　あれ・・効かない!?」
　同時に永琳を中心に幾筋ものレーザーと無数の弾幕が撒き散らされる。そして後ろから現れたのは、蓬莱山輝夜である。
「出たわね。真打ちが。」
　仕方なく一度退却する吸血鬼姉妹。この永琳と輝夜の合わせ技は耐久スペルであるため、いかにフランの能力が強力であろうとダメージを与えることはできない。時間が経過するのを待つしかないのだ。
「さて、では私も入れて仕切り直しましょうか。」
「姫様、お手を煩わせることになり大変申し訳ありません。」
「あら、良いのよ。どうせ暇だし。」

「出たな。ニート姫。」
「これはこれは吸血鬼のお嬢様方。暫く私がお相手して差し上げるので、良い感じに暇が潰れたら帰ってくださいね？」
「ああ帰ってやるよ。お前らの首を持ってな。」

次の瞬間、全員が同時に動き出し再び眩い弾幕戦が始まった。
「呪詛『ブラド・ツェペシュの呪い』」
「禁忌『カゴメカゴメ』！」
「神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』」
「神脳『オモイカネブレイン』」

この第二戦は、飛んだ弾の数こそ多かったもののあっさりと終局を迎えた。

鈴仙を完封した咲夜の手によって。

「時符『チェンジリングマジック』おまたせいたしました。妹様、新しいおもちゃです。」

「!!　わぁい！」
　いつの間にか輝夜の腕ががフランドールの手に握られていた。
「えっ？いつの間に!?『永遠と須臾を操る・・
「効かないよ。」
　輝夜は自分の能力を使い脱出しようと試みるが何故か能力は不発だった。
「私の能力で、『時間が連続体である』と言うことを一時的に確定させた。お前の能力はしばらくの間使用不可能だ。」
　パチュリーと咲夜によって考え出され、レミリアが実行した輝夜封じがこれである。時間が連続体である、という運命をレミリアによって（一時的に）定められてしまった輝夜は、須臾を操ることが出来なくなってしまったのである。
「さぁ、藪医者。あんたがさっさと降参しなけりゃこの姫様がフランのおもちゃになるよ。あぁ、あとその兎も。」
　鈴仙は既に咲夜に簀巻にされていた。
「・・・わかったわ。降参よ。」
「よっしゃ。じゃあ今ここで永遠亭の住人全員が今後紅魔館に服従することを誓ってくれ。」
「・・・・・誓いましょう。」

永遠亭が紅魔館に従属。幻想郷の勢力図が一つ書き換わった。

さて、この時紅魔館は白玉楼と守矢神社による天空連合の幽々子、神奈子と天子の三人によって攻撃されていた。これに対するのは、紅魔館に残った守備隊のパチュリーと紅美鈴、そして館に仕込まれた魔導防衛装置である。